

---

# 眠り姫

YSR

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

眠り姫

### 【Nコード】

N1411G

### 【作者名】

YSR

### 【あらすじ】

僕は、高校生になったとき、とある女子と知り合った。その人はなぜかいつも眠っていて・・・。

これは、僕が出逢った、とある女子についての物語である。

僕は、とある高校に入学した。入学式の後、僕ら新入生は、教室の席に座った。皆がそれぞれに喋っている中、僕は、隣の席に座って・・・いや寝ている女子を見ていた。

実にぐっすりと眠っている。ちよつと揺すつたぐらいでは起きそうに無いほどだ。ここまで無防備だと思わず触りたくなつたが、ここは我慢した。

担任の先生が教室に入る。その時も彼女は寝ていた。軽い挨拶の後、先生は出欠を取った。

「秋野早苗」

「はい」

「石田正樹」

「はい」

・・・

「田辺俊夫」

「はい」

「寺西祥子」

「はい」

・・・

「茂木正人（僕）」

「はい」

ここまでは順調。流石に入学式の日には休むなんてまずありえないだろうし。

しかし、次が問題だった。

「安田綾香」

「・・・」

「（聞こえなかったのか？）安田綾香」

「・・・」

彼女は、問いかけに無視してずっと眠り続ける。

流石に先生も怒った。

「・・・安田あ！返事をしろ！」

・・・すると彼女は、左手を上挙げて、「はい」と示したのだっ  
た。

それから、彼女の睡眠は続いていた。

授業中・休み時間問わず、常に眠り続けている。勿論、登下校も  
だ。

当然ながらそれは大変目立ち、ふざけて揺すってみたり、いたず  
らしたり、驚かそうとしたり、拳句に画鋏などのいじめとも取れる  
行為に及ぶ生徒もいたが、彼女は一向に目を覚まさなかった。

とは言っても、一応授業中には手を挙げて（指された時は、僕が突  
っついて教えてあげた）、板書し、寝てはいるが、授業はサボって  
はいないらしい（体育以外・・・）。

先生が彼女の親御さんから聞いた話によると、家でもあんな調子  
らしい。なぜかは分からないそうだ。

夏が過ぎ、秋が通り過ぎて、冬になった。

彼女の眠りは相変わらずで、その姿から「眠り姫」と呼ばれてい  
た。行事ごとには一応参加していたが、どんな時もやっぱり寝てい  
た。

流石にこのころになると、起こそうとする者などはいなくなり、  
ただいるだけの存在として無視するようになった。

しかし僕は、いまだに彼女のことを見つめていた。

・・・別に見とれていたわけではない。なにやらヨコシマなこと  
を考えていたわけでもない。

ただ、どうして寝て・・・いや、どうして目をつぶっているのか、

ということである。

手を挙げたりして反応したり、そもそも登下校している時点で、多分寝てはいないだろう。仮に寝ていたとしても、それはいつもではないだろう。

友人にも尋ねてみたが、満足な回答は得られなかった。よっぽど寝不足なんだとか、嗜眠病じゃないかとか、もしかして慢性のものもらいとかで目が開けられないのではとか……。

やはりこれは、自分で考えることにしよう。

そして一月。とうとう三学期になった。

冬休み中、ずっと考えていた。このことを言うべきか、言わざるべきか。

しかし、言わずに後悔するなら、言って後悔したほうがいい。

そう結論付け、僕は彼女にこう言った。

「あの……、ちょっと聞きたいことがあるんだけど、いいかな？」

彼女は、首を縦に振って頷いた。

「言ってしまうえば単純なことなのかもしれないんだけど……」  
彼女は首をかしげた。

「どうして、綾香さんはいつも目を閉じたままにいるの？」

そう言うと、彼女は一瞬驚いた風な顔をしたが、すぐ元に戻した。そして、ゆっくりと首を横に振った。

「うーん、そうか。でも、何か理由はあると思うんだけどなあ」

彼女は俯いたままだ。

その時、授業のチャイムが鳴った。休み時間が終わった印だった。  
(こうなったら……)

その日の放課後。僕は真っ直ぐに、彼女の家に向かった。

実は一回、彼女が風邪を引いたときに家にプリントを届けてあげたことがあって、それで場所を覚えていたのだ。

チャイムを押す。チャイム音がしてから数秒後、「はい」と言う親御さん（彼女の母）の声があった。

「どなた？」

「茂木です」

「ああ茂木君。綾香なら外だけど、どうしたの？」

「実は、お母さんにお尋ねしたいことがあります……」

「……そう」

「そうです。ちゃんと手を挙げたりしているのに、どうしていつもあんな感じなんだろうって」

「そうねえ。あの子はいつもこうだったから……」

「……いつも？」

「ええ。と言っても……」

「『と言っても』ということは、やっぱり目を開けていたときがあったんですね!？」

「……」

やはり。僕は、自らの予想が当たったことに少し喜びを感じていた。

いくらなんでも、生まれたときから眠っていたわけではあるまい（寝てたとしたら、看護師さんら在必死に起こそうとするだろう）。何かきっかけがある筈である。

そこを指摘すると、終に親御さんの重い口が開いた。

「実は……」

「綾香は、元々から寝ていたわけじゃなかったんです」

「僕もそう感じていたんです。ちゃんと手を挙げているし、登下校しているし。不思議でした」

「……あれは、去年の春のことでした。綾香、始業式の時、ある同級生と喧嘩をしましてね。普段はそういう性格ではないんですけど、そのときは何かあったんでしょうかね……」

「喧嘩……」

「そしてその時に、綾香の指が相手の子の目に一瞬刺さって……刺さって……」

「すぐに病院に連れて行かれて、幸い失明は逃れたけれど、片目の視力が極端に落ちてしまつて……」

「……」

「死ぬほどこちらは謝ったのですが、当然向こうはなかなか許してくれなくて……」

「……」

「で、治療費と慰謝料の返済が終わるころには、もう卒業だったんです……」

「……」

「……多分」

「？」

「綾香の行動は、綾香なりの罪滅ぼしだったんでしょかね……そこまで聞いた時、僕の目にはうっすら涙が溢れていた。一年間のその苦しみの罪滅ぼしに、同じ一年間、視力の無い生活を耐えたのだ。やはり寝ても、ただ目を瞑っていたので無かったのだ。」

「……わかりました。ありがとうございました」

そう言つて僕は、彼女の家を後にした。

「ありがとうございました」

「……綾香にはこれ、内緒よ」

そう言つて僕はドアを閉め、振り返つて帰ろうとした……その時。

目の前に、彼女が立っていた。

「……あ」

彼女が、初めて声を発した。少なくとも、僕にとっては。

「……ああ……お母さんから、全て聞いたよ」

「……」

「そう、だったのか」

「・・・」

「君は・・・すごいよ」

「！」

彼女は予測していなかったのだろう。自分が、そんな風に感じられるのを。

「確かに君は、とんでもない過ちを犯してしまった。それは変わらない」

「・・・」

「でも、僕はそこから、罪滅ぼしをしようとし、そして実行した君の優しさに感動したんだ」

「・・・」

「・・・ねえ」

「？」

「目を、開けてくれないか」

彼女は終に、その、一年間もの間封印していた目を開けた。

それは、とても清らかな、汚れていない目をしていた。

その年の春。始業式、彼女の目はしっかりと開いていた。まるで、現実をしっかりと見据えるような。

そして今も、僕は、親しみと尊敬をこめてこう呼ぶ。

「眠り姫」と。

(後書き)

うーむ、第一作目がまだ完結していないにもかかわらず短編の投稿。  
お許してください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1411g/>

---

眠り姫

2010年10月8日15時57分発行